

中村正志 編

『東南アジアの比較政治学』

アジア経済研究所アジ研選書No.三〇



他の国際制度と比較して論じる（第七章）。

われわれがなぜ制度に注目するのか。五カ国を比較するのはなぜか。政治学の理論を用いるのはなぜか。

本書は、東南アジア域内先進国のタイ、マレーシア、シンガポール、フィリピン、インドネシアの政治に関する概説書である。政治制度に焦点を当てて、トピックごとに五カ国を比較し、国ごとの違いがなぜ生じたのかを政治学の理論を使ってわかりやすく説明した。それぞれが個性的な国だからといって別々に論じるのではなく、逆に共通点をつまみ出して五カ国をひとつの枠組みに落とし込むというでもない。各国間の差異を把握したうえで、なぜ違つかを一貫した論理で説明する。いかにもありそつで、実はこれまでなかった本である。

具体的には、まず政治制度の総体としての政治体制（第一章）と、執政・立法関係（第二章）、司法制度（第三章）、政党（第四章）、選挙（第五章）の各制度について解説する。次いで、制度の不備を一因として生じ制度の変化を促す社会運動を扱う（第八章）。最後に、この五カ国が設立し現在も中心的役割を担うASEAN（東南アジア諸国連合）について、開発途上国が設立した

この三点については序章で詳しく説明した。それだけでなく、序章には各章の要点も書いてある。この序章は、アジア経済研究所のウェブサイトに掲載されていて無料で読むことができる。本書の紹介ページにPDFファイルへのリンクが貼ってあるので、こちらからご覧いただきたい（<http://www.wide.go.jp/Japanese/Publish/Books/Sensho/030.html>）。

ところで筆者が思うに、このコーナーを目にしているあなたは相当なアジア通に違いない。街中では滅多に見かけることのない『アジ研ワールド・トレンド』をわざわざ手にとってお読みになっているのだから。そんなあなた、われわれ書き手にとってはコアな想定読者層の一人だ。だからこれをご縁にぜひウェブ公開済みの序章をお読みいただきたいし、その序章の要約のようなものをここに書くのは気が進

まない。そこで以下では、本書が「何でないか」ということについて書くことにしたい。何かをはっきりと理解するには、それが何でないかを理解することが役に立つ。しかし本書でそんな話をする、多くの読者をかえって混乱させかねないと思つてやめた。そのやめた話を、ここでごく簡単にしてみたい。

① それぞれの国や事件を詳しく知るための本ではない

本書では、タクシン追放クーデターやスハルト政権崩壊、アジア通貨危機などの事件への言及がある。また、なぜマレーシアでは長期政権が続いているのかとか、なぜフィリピンでは政党が弱いのかなどといった個別の問いも出てくる。一国研究の場合、それぞれの事件・現象につながった要因がいくつも指摘されるのが普通だ。ひとつひとつの具体的な出来事の要因をできるだけ多く発見していくことこそ、それぞれの出来事を、ひいてはその国を詳しく知ることだといえるかもしれない。しかし、それは本書の目指すところではない。

制度の違いは何に由来するのか。また、制度の違いがどんな政治的帰結の違いをもたらす傾向にあるのか。それを示すのが本書の目的である。個別の事件・現象は、この文脈のなかで説明される。ひとつの出来事についていくつもの要因を列挙するかわりに、基本的に、多数の国を対象とする実証研究で妥当性が認められた理論と五カ国の現実とを突き合わせて説明する。このようなアプローチに対して、それぞれ

の出来事の説明としては不十分で不完全だと考える人もいるに違いない。

② 実証のための少数事例比較研究ではない

一方で本書は、一般性の高い理論的仮説を提示して、その経験的妥当性を検証すべく比較事例研究を行う本でもない。比較政治学に通じた読者であれば、本書のタイトルからこのような内容を期待されるかもしれない。だとしたら申し訳ないが、これも本書の目指すところではない。「政治学の理論を使った地域研究」と呼ぶほうが実態をよく表しているかもしれない。ついでに付言しておく、東南アジアは社会的、経済的、政治的に多様だから、国を観察の単位とするなら、差異法による少数事例の比較分析はかなり大雑把なものにならざるを得ない。

では、本書は何を目指しているのか。なぜ中途半端ともいえるアプローチをとったのか。しつこく恐縮だが、それは序章に記したのでアジ研のウェブサイトをご覧いただきたい。そのうえで本書の狙いに共感できたら、ぜひ通読していただきたい。損はさせません。

（なかむら まさし／アジア経済研究所 東南アジア研究グループ）